

2006年度大須オペラ, メイヤック&アレヴィ作「青ひげ」台本翻訳(上)

— 名古屋における演劇社会学の試み資料編

The Former Part of the Translation of Meilhac & Halévy's *Barbe-Bleue*
Prepared for the Ôsu Opera Performance by Super-Ichiza in 2006:
Documents for the Sociology of Theater in Nagoya

鎌 田 大 資

Daisuke KAMADA

翻訳者の序文

本稿は、フランスの戯曲『青ひげ』([1868] オффエンバック作曲)全訳の前半である(2. Meilhac et Halévy 1900-1902: 222-345のうち 222-289)¹⁾。この訳文は愛知県名古屋市中区にある大須演芸場での、2006年7月11日から8月1日までのスーパー座オペラ公演のため作成され、上演の際、劇中歌の歌詞を中心として若干の編集、加筆を経て使用された²⁾。台本の補綴、演出にあたったのは主催者の岩田信市(1935-2017)であった³⁾。今回、紀要の紙面をお借りして原稿の公刊を試みる目的は、岩田の逝去を悼み、美術界、演劇界にお

いて、これまで論及される機会が少なかった彼の演劇活動の再評価の機運を、盛りあげていくきっかけを作ることである⁴⁾。大須演芸場において岩田が取りくんだ歌舞伎、オペラ上演は、既成の商業、自主演劇での上演機会が減少していた百年から二百年ほど前の多様な戯曲を、なるべく内容を割愛せずに原型のまま復活させるものであった。オペラにおいては、多数の本邦初演の演目をオリジナルの楽譜、台本から編曲、翻訳、再構成し、総合的な復活上演を実現し、歌曲のみならず舞踊の振付やセリフのやり取りも含め、初演当時、opéra comiqueと称されたコミカルな歌劇の姿を今に伝えるものであった。オペラでは原語で歌曲のみを抽出して歌手ののどを聞かせる

1) 翻訳に際しては、1872年以降にアメリカの劇場などで販売されたと思われる英訳台本(3. Tryon n.d.)も参照した。原作は3幕で、うち2幕を2景に分けているが、英訳では全体が4幕に構成され、各幕に場の区別はない。また英訳ではト書きが省略されている。現在、フランス語原文はインターネット上で参照できるが、わたしが使用した英訳テキストはネット上には掲示されていない。フランス語原作は大学図書館の相互貸借サービスにより、英訳はネット通販で入手した。本稿はフランス語原作に従って訳す。

2) 岩田による変更とは別に、今回の訳稿では、翻訳者自身の心境の変化により保管していたデータに若干の修正を施している。

3) 上演台本は公演期間中に劇場ロビーで販売されていた。

4) 岩田の前衛美術家としてのパフォーマンス、自主映像製作から演劇活動までを回顧するものとして、芸術批評誌『Rear』の特集「追悼：大きな岩田信市」(2018(41): 1-145)が充実している。また前衛美術家のパフォーマンス活動全般の研究として黒ダライ兄の著作(1. 2010: 353-373)があり、1960、70年代、岩田と加藤好弘(1936-2018)を中心に活動した集団「ゼロ次元」が考察されている。歌舞伎、オペラへと発展した岩田の演劇活動は、ゼロ次元という出発点から自然に展開したものだが、1970年代初頭の海外公演の試み以降、名古屋という一地方都市が活動拠点となったため、現状では相対的に論及される機会が少ない。

のが普通になっている日本では、日本語で歌い踊り笑わせるスタイルの芝居にして上演する活動は、画期的だったと論者は考えている。

スーパー一座で翻訳、初演されたオペラの戯曲は以下のとおりであり、ほぼすべてを鎌田とその協力者で翻訳した。

- 1999 第8回大須オペラ『嘆きの聖母』（歌詞のみ鎌田が翻訳）
- 2000 第9回大須オペラ『The 芸者』
- 2001 第10回大須オペラ『ブン大将』⁵⁾
- 2002 第11回大須オペラ『パリの生活』
- 2003 第12回大須オペラ『ユートピア国株式会社』
- 2004 第13回大須オペラ『山賊』
- 2005 第14回大須オペラ『サルタンバンク』
- 2006 第15回大須オペラ『青ひげ』
- 2008 第17回大須オペラ『パロマの謝肉祭』

『青ひげ』の全体は大部となるので前後に分け、今回は2幕1景までを収録する。各幕の分量上、若干、前半が長くなるので、本文に入るまえの序文は最小限にとどめ、スーパー一座のオペラ上演活動の概要解説などは、後半とともに掲載する。

なお本稿の副題に「演劇社会学」と掲げ、「資料編」と銘うったのは、今後、明治、大正、昭和戦前期の日本におけるオペラ紹介の歴史と、スーパー一座の演劇活動を対比する総括的研究を、社会学徒として翻訳者が準備しており、その「資料編」の一部として本稿を作成したためである。文学研究、文化史一般の資料とする意図はない。スーパー一座で上演したオペラ作品の原作を日本語で読み、上演

時の楽しい情景をしのぶ手がかりとしていただければ幸いである。

以下本文。

青ひげ 3幕のオペラ⁶⁾

配役

青ひげ公 テナー

ポポラーニ、青ひげに仕える錬金術師 バス

オスカル伯爵、総理大臣 バス

ボベシュ王 テナー

サフィール王子、羊飼いに変装している テナー

アルヴァレス、貴族

ブーロット、羊飼いの娘 ソプラノ

エルミア王女（フルーレット） 王の娘 1幕ではフルーレットという名の農民の娘
ソプラノ

クレマンティーヌ王妃 ボベシュ王の妃 ソプラノ

エロイーズ、エレオノール、イゾール、ロザリンド、ブランシュ、ドロテ 青ひげの妻たち

小姓

合唱 貴族、その夫人、ボベシュ王の衛兵、青ひげ公の兵士、農民など

時代 十字軍の時代

舞台 1幕：青ひげの領内の村、2幕：ボベシュ王の宮廷、3幕：錬金術師の洞窟、4幕：ボベシュ王の宮廷

1幕

村の広場、上手、前景には、サフィール

5) この芝居は大正前後の浅草オペラなどでたびたび上演され、榎本健一の標題曲でもよく知られているが、当時の台本や編曲楽譜はおろか、上演の詳細についての情報も入手できず、フランスでの初演当時の楽譜や台本から独自に再構成した。

6) 2幕が2景に分かれる。

の小屋。扉の上に開けられる窓がある。その扉のそばに小さな腰掛け。正面、下手向けにフルーレットの小屋。その扉の横には窓、そのへりに大きな細長いカゴがあり花が入っている。その小屋には楽しいげなあずま屋の杵が寄せかけられている。後景には、登ることができる山が、舞台真ん中から始まり、上手から下手へ、下手から上手へと続く。山の高いところ、地平線にかかって見えるのは、岩山の上に建てられた青ひげの館である。

第1場 サフィール、続いてフルーレット

幕が上がると、上品な羊飼いの装いのサフィール、サテン地の体にぴったりして、すそが長く袖つきの古風な衣服（justaucorps de satin）をつけている。小屋から出てきて、あちこち見回して、舞台中央に戻る。

サフィール（独り、レシタティーボ）自然のなか万物は目覚め、太陽は寢床を離れる
耳にはミツバチの羽音、ニワトリ時を告げ、牛が鳴く

さあ、夜が明けた…ぼくが好きな羊飼いの娘はまだ出てこないな…（フルーレットの小屋を指さし）あの子はそこにいる…すやすや眠っているのはこの小屋のなか…フルーレット！…ねえフルーレット！…いい曲を聞かせてここに来てくれるってことをあの子に教えてあげよう。（フルーレットの小屋の扉に近づき、登場のときから手に持っていたフルートを吹く準備をする。ワトー（Watteau）の絵のようなポーズで。試し吹きで音を出す。小さなフルートなのにトロンボーン

のような音をする。びっくりして演奏をやめる。そしてあきらめる。）

ちょっと響きすぎちゃうけど。

（そして、吹き続ける…メロディに惹かれフルーレット登場。パ・ドウ・ドゥーのように、優美にポーズする。羊飼いの青年は遠ざかり、羊飼いの娘はやさしく後を追う、羊飼いの青年は立ちどまり、羊飼いの娘と一緒に、舞台の正面まで二人で進んでくる。）

2重唱 アンサンブル（一緒に）

それ、薔薇の花が開くよ、毎朝、こんな具合
フルートで呼びかけるのさ（よ）
庭をそぞろ歩こうよ

フルーレット 2人きり、いとしい人と、甘い言葉を交わし、
行ったり、来たり、木陰をさまようのよ。
あの人と言うの。「4月には、何でも恋するのさ！
春だから、野原も緑に飾りたてるのさ。
恋しよう！ 何てすてき！ たっぷり恋しようよ、さあ！
この世で、こんなに楽しいことはないさ！
秘密めいた森のおかげで、大胆になるわ。
手を握られて、「だめ、やめて！」と言っても意味ないの。

アンサンブル 2人きり、いとしい人と、甘い言葉を交わし、
行ったり、来たり、木陰をさまようのよ。
恋しよう！ 何てすてき！ たっぷり恋しようよ、さあ！
人生、この世で、こんなに楽しいことはないさ！

フルーレット あら、あなた！

あの人はどぎまぎして、馬鹿みたいなの。
でもやんちゃな人、時々、微笑んで話し
かけるの。

何の話でもないけど、生きいきした言葉
で

こころの奥底で、あたしを立ちどまらせ、
どきどきさせ、喜びで赤面させるの。

わたしの方は、怖がらずに、あの人の話
を聞くわ。

それで、小さな声で答えるの。

「そうね、春はすてきね！ 春は！…」

あの人は赤くなり、青くなる。

あたしにはわかる。2人の心臓がどきど
きしてるのが！…春のせいだわ！

たまらず、あの人が叫ぶの。「ああ、好
きだよ！」

あたしが好きですって！ あたしが好き
ですって！

アンサンブル 2人きり、いとしい人と、甘
い言葉を交わし、

行ったり、来たり、木陰をさまようのよ。
恋しよう！ 何ですてき！ たっぷり恋
しようよ、さあ！

この世で、人生こんなに楽しいことはな
いさ！

フルーレット あなたは何て幸せなの

サフィール 君は何て幸せなんだ

フルーレット いとしい人！

サフィール かわいい人！

フルーレット 朝のうちは

サフィール この庭で

フルーレット 会いましょう

サフィール そして繰り返そう

アンサンブル 「好きだよ！…2人は恋して
る！」

フルーレット ああ、とても楽しいわ…庭を
散歩して、歌うの…でも少しおしゃべり
しても悪くないでしょ！

サフィール おしゃべりしよう。

フルーレット あたしを何人もの羊飼いが追
いかけまわしていたって、あなたは後で
言うでしょうね、

サフィール そりゃ、まぎれもないことだね。

君ときたらなんともかわいしいし、

フルーレット 年とった兵隊の娘にしちゃね、
お父さんはあたしに名誉と花屋の商売つ
ていう遺産を残してくれたわ。一本一本、
こころをこめて世話をしているのよ。

サフィール その通りだね。

フルーレット なかには抜け目ない人たちも
いて、贈り物で気を引こうとしたわ…ど
んな風にそれを受けとったかも知ってる
でしょ…胸のうちではこう言ってたの。
「あたしが選ぶのは純朴な人だから、す
ぐに大きな問題にぶち当たるでしょうね。」

サフィール (やや困惑して、独り言) なぬ！
…

フルーレット あたしが選んだのはあなた…
純朴な人よ…でもその大きな問題に無理
に近づこうとはしてないわね。

サフィール さっぱり何のことかわからない
よ。

フルーレット でも、ちっとも難しいことな
んかじゃないのよ…結婚の話はしないの
ね。

サフィール 結婚か！…

フルーレット 何の話だと思ったの。

サフィール そりゃね…願ってもないことな
んだけど…家族がねえ。

フルーレット あんたの家族でしょ。羊飼
いの家じゃないの。

サフィール ああ！…

フルーレット 何が言いたいのか…説明して

よ！

ブーロット (Boulotte)⁷⁾ (舞台袖で) オーラ、
黒ちゃん！…灰色の羊に気をつけな！…
噛んじまいな、それ、噛みつくんだよ！
サフィール あとにしよう！…あとだよ！…
聞こえるだろ…

フルーレット もちろんよ…ブーロットね。
サフィール ほく、怖いんだよ。あのブーロッ
トが！

フルーレット あたしもよ！

サフィール 怖いのは、あいつがほくにほれ
てるからさ…それに、ほくの方ではちっ
ともあいつにほれてないからって、いつ
でもほくをおとうとするんだ… (フル
レットの小屋に入ろうとして) なかに入
ろう。

フルーレット (押しかえし) 自分の家に入っ
てよ…でも、この話の続きはまたね…

サフィール わかったよ。

ブーロット (舞台袖で) またな、ノワロー！
羊を見張ってなよ…あたしゃ、ここで用
があるんだから。

二人とも ブーロットだ！…ブーロットだよ！
…

(二人は大急ぎでそれぞれの家に入る。
ブーロットは奥、下手から現れる。)

第2場 ブーロット、独り。

小唄

1, 村にゃあたしよりも羊の群れの世話がう
まい羊飼いいもいるでしょ
ミルクを絞ってもあたしよりもでんぷん
や水を混ぜない人もいるでしょ
でも、こん畜生、
このブーロットちゃんをしのぐものはないよ、

こといたずらにかけてはね。

2, さて、いたずら娘はいたずら男と遊びた
いのさ
あたしのいい人、あそこだよ…恋しちゃっ
たのさ
嫌がるなんて馬鹿だろよ！
だって、こん畜生、
このブーロットちゃんをしのぐものはないよ、
こといたずらにかけてはね。

毎朝、同じことさ…のらくら野郎の窓の
下に来ては歌を歌うのさ、野郎にあたし
はほれてるってわけ！…聞こえない振り
してるんだ…ほれ！…ちょっと！…
(小石を拾い集めてサフィールの窓に投
げ込む。ガラスの割れる音がする。サ
フィール、怒り狂って窓に出てくる。)

第3場 ブーロット、サフィール

サフィール (ブーロットを見て) また、あ
んたか…

ブーロット そうともさ。

サフィール ちっとはほくを静かにさせてお
いてくれんのかね。

ブーロット だめさ。

サフィール そんならちょっと待ってな。お
りてくから！

ブーロット 他のことは頼んでないよ。(窓
は閉まる) さあご覧なさい…あいつを見
たら、恋せずにいられるものかどうかわ
かりますよ。

(サフィール、小屋から出てくる)

サフィール さあ、この上、何がお望みかね。

ブーロット おわかりだろ、あんたが好きな
んだよ。

サフィール そのことはもう聞いたよ。おと

7) boulotteという単語自体に、「ずんぐりした女」
という意味がある。

といおいで〔その話は昨日の4時半までに締めきったよ〕⁸⁾…そんなことしても時間の無駄だってことも申しあげたはずだがね…

ブーロット わかってるさ。でも恋心はとまらないのさ…好きになっちゃう理由は山ほどあるさ…まず、あんたの人生に謎がある。ある日、突然、あんたはこの小屋を買いとった。どっから来たの…誰なの…それは誰も知らない…他の連中のことは知ってるさ。でもあんたのことは知らない。だから知り合いたいのだ…それにあんたは他の連中みたいな羊飼いいじゃないね…そんな立派なサテンのぴったりの服を縫った仕立て屋は誰なんだ…村の仕立て屋じゃないね。あんたの髪はいい匂いで、手は真っ白。そんなこんなであんたにほれたのださ！

サフィール お話のなかに気を悪くするようなところは何もないが…だけど、君のこと好きじゃないね。

ブーロット 何でよ。

サフィール わかんないよ。

ブーロット ああ！ お見通しだよ…あんたはそこに住んでるすました女にほれてるんだね…

サフィール フルーレットかい。

ブーロット そうさ！ フルーレットさ…ちゃらちゃら着飾った羊飼いい女さ…だけど、安心しな、ほれ、今度会ったら、ひどい目にあわせてやるよ…

サフィール さすがにそこまではしないだろ。

ブーロット 見てりゃわかるさ！…しかし、あの子の話はやめて、あたしたちの話をしようよ。

サフィール 何の話がしたいんだ。

ブーロット キスしてよ。

サフィール きゃあ！

ブーロット 今すぐキスして。

サフィール 言っとくけどね…

ブーロット (脅して)もったいぶらないでよ！

…あんた、あたしにキスしたくないの…。
(腕まくりして)したくないの…さあ、したくないのかい…

(サフィールは恐怖にかられる。ブーロットは冷徹な決心とともに彼に歩み寄る。
サフィールは下手に逃れる。)

サフィール ああ！あの…近づくと…自分の身は守るぞ

ブーロット それがどうした…言ったわね…
したくないんだね。

サフィール だめだ！

ブーロット 1回かい…2回かい…

サフィール だめだ！

(ブーロットはサフィールに襲いかかる。
サフィールは逃げる。ブーロットは追う。
サフィールは上手奥から退場。オーケストラの音楽。)

第4場 ポポラーニ、続いて伯爵

ポポラーニ (上手より登場、夢見心地で)
ここへ来たのは、バラの王女〔徳行賞のバラの冠を授けられた少女〕を探すためじゃ…見つければ、ばっちりじゃ…じゃが、いなければ…

(そのとき、下手奥から登場した伯爵が肩を叩く。)

伯爵 ポポラーニじゃろ…

ポポラーニ (振り向いて)閣下！(深く身をかがめる)

伯爵 身を起こすが良い、許すぞ。

ポポラーニ オスカル伯爵じきじきのお出ましとは！…ボベシュ王陛下にしたがう大身の殿上人の閣下が！

8) [] 内には訳文に関する迷い、訳語の揺れを指示する翻訳者の補足を挿入している。

伯爵 さよう…しかし、静かに！

ポポラーニ 口をつぐむでござろう。

伯爵 ここに2人の旧友が集うとは…喜び限りなし！…

ポポラーニ その一人はもう一方よりはるかに高い身分に上られましたな！

伯爵 それよ、誠に。お主は青ひげの錬金術師のままじゃでな。わしは国王に仕える随一の家来…

ポポラーニ 出世のてだては何でござる。

伯爵 ご婦人を使うのじゃ。

ポポラーニ そりゃ妙策。

伯爵 さてと、お主は、不自由はしておらんか…

ポポラーニ ぐちを言ってもはじまりませんわい…じゃが、わしの名が歴史に跡をとどめることはありますまい。それに引き換え、あなた様は…

伯爵 うらやむことはない…内情がお前にわかればな！…

ポポラーニ そういうものですか…

伯爵 話題を変えよう…そちも認めざるを得まいが、お主の主人はみょうちくりんな男じゃな。

ポポラーニ （びくっとして）何ですと。

伯爵 あの妻どもにどう始末をつけたのじゃ…3年に5人もじゃ！…して、今はやめのはずじゃな。

ポポラーニ 木曜からは。

伯爵 やあ、面妖な！

ポポラーニ 悲惨なと言うべきでござろう。

伯爵 まさに、悲惨じゃ。また疑惑を招くことじゃろうて。

ポポラーニ そりゃ…見当違いでござろう…わしが太鼓判を押しますよ…

伯爵 位の高い方の行いを根ほり葉ほり調べることはないとは、存じておる…ああ！ただの炭焼きのことならよいのに、それ

も昔のことじゃ…それはそうと、話題を変えよう…ここへは何をしに來たのじゃな。

ポポラーニ バラの王女を探しているのです…主人が執心でございましてな、どうしても冠を授けたいとかで。

伯爵 あやつが、他のことに心をくだいとるところなんか、天地にかけて1度も見たことがないわい！

ポポラーニ もう触れを出しましてな。村じゅうの若い娘に知らせました。15分とかからずここに参ることでしょう。

伯爵 （笑って）村じゅうの娘か…そのなか

に一人でも見つかると思うのか…

ポポラーニ やあ、意地の悪い…おりますともさ…

伯爵 ぬう！ おりますとも…とは聞きあきた…わしの方もな、偶然ながら、わがあるじ、ボベシュ王も一人のバラの王女に冠を授けたいとお望みじゃから、その一人の娘を見つけだす妙策を講じたぞ。

ポポラーニ どうするのでござる。

伯爵 娘どもを何人も集めてくじ引きをさせるのじゃ。

ポポラーニ そりゃ妙案。

伯爵 よい考えであろうがな！…どんな事態にも対応できるぞよ。もし一人もバラの王女がいなければ、すぐさま一人を探し出せる…何人かいたらそのなかから一人ねたみ心を引きおこさずを選びだせるのじゃ。

ポポラーニ まことに…閣下のお考え、わしの方でもやってみますわい。

伯爵 うまいこうぞ…話題を変えよう…（上手へ歩く）

ポポラーニ 何のお話でござろうかな。

伯爵 わしがここに來たわけを話すとしよう。わしが來たのはな、若き王女を探すため

じゃ。

ボポラーニ どの王女ですと。

伯爵 わがあるじ、王の娘じゃ。

ボポラーニ わかりませんな。

伯爵 話せばわかることじゃ…今から18年前、王に娘ができた…3年後には息子ができた…息子ができてみると女に王冠を譲ることが耐えがなくなったのじゃ。「わしは息子に国を治めさせたい」とおおせられるのじゃ。「娘はいやじゃ」と。この国でも王位継承から女をはずすサリカ法 (loi salique) を制定するよう、わしは進言した。「だめじゃ」とおおせでな。「ご先祖様の慣行に手を加えるのはよそう…それより、娘を厄介払いしてしまうのだ。」お言葉の通りのことがなされた。娘をカゴに入れて、大きな川に流した…そして…

ボポラーニ そして…あなたさまのおなりじゃ！

伯爵 よくわかったな。不幸せなことにじゃ、若き王子は悪くなられた。ご婦人たちの手を離れるや否や、ご自分を男にならせるために、ばかげたことに頭を突っこみ、おかげであつという間にばか者になられたのじゃ…1億2千万もの人間の運命を預けられておることにも思いいたらぬというわけじゃ！…以前は、わしは語らなかった…しかし、今日は、まったく斬新な考えがある…

ボポラーニ 何でも検討にふす精神ですな (L'esprit d'examen) …

伯爵 おっと！ そいつは言わんでくれ…「何をするのだ」と殿もおっしゃっておる…さて、一方、クレマンティーヌじゃが…

ボポラーニ クレマンティーヌとは、閣下…

伯爵 こういうべきじゃった。女王陛下じゃ…女王陛下、いやクレマンティーヌ女王

陛下は思い出されたのじゃ、ご自分に娘がおありになったということにな…王のおおせられることには「その通りじゃ、すっかり忘れておったぞ…」そしてわしのほうに向き直られてじゃ、「オスカル伯爵、24時間つかわそうから、王女を探しだしてくれ」とおっしゃるのじゃ。すぐさま、わしは出立し…

ボポラーニ お姫様を見つけだされると。

伯爵 そう願っておる。

ボポラーニ じゃが、もし見つからなければ…

伯爵 最初に現れた農婦を捕まえて、戴冠行列のみこしに乗つけちまうのさ…とは言え、今のところは、ホンモノが見つかることを祈っておる…土木局の最高会議を招集して、こう聞いてみたわい。川にゆりかごを浮かべてみたら、まっすぐに海まで行くものかとな。土木局の答えはこうじゃ。「さようすな。その川に堰 [せきとめるもの] がなければそうなります。」「われらの大川に堰はあるか。」「ございます、青ひげ公の城の手前です。」こういうわけでわしが来たのじゃ…ここであのカゴは止まったに違いない…王女を引きとれるとすればここしかない…

ボポラーニ みごとな推論でございますな！

伯爵 こうした推量のおかげで、わしは人を治める立場になったのじゃ…かく推量し、起こる事柄すべてを幸運に変えるためにな…さてと、一人の幸運な娘があらわれるかじゃが…バラの王女を選ぶ娘たちの大集会でな。

ボポラーニ まったくでござる！

(下手からサフィールが戻る。ブーロットに追いかけられ続けて息ぎれしている。自分の小屋にたどり着いて扉を閉める。今度はブーロットがやって来て扉が閉

まっているのを見つける。）

ブーロット しまった！

第5場 同じ、ブーロット

ポポラーニ おや！ ブーロットだ！

ブーロット おや！ 錬金術師のだんなじゃ
ねえか！

ポポラーニ そこで何をしているのだ。

ブーロット ちょっと運動をね…昼飯の前に。

伯爵 （彼女に剣を捧げ）美しい！…美しい
娘じゃなあ！

（ブーロットは真ん中まで歩く）

ポポラーニ （伯爵と同じ身振り）まったく
ですじゃ！…

ブーロット （下手に歩きながら）まあ、まあ！
くすぐったいことというじゃねえか！…

ポポラーニ （小声で伯爵に）あの子を王の
姫にしましょう。

伯爵 （小声で）やあ！やあ！ そんなこと
で困らせるなよ…バラの王女にしとけよ。

ポポラーニ （小声で）だめですよ！…とん
でもない…何かと噂が多すぎて。

伯爵 それも不思議はない。きれいな子じゃ
からな！

ポポラーニ いかしたシャンだ！

（二人は再び剣を捧げ持つ）

ブーロット （上手に歩きながら）おや！
わらかしてくれるよ！…

伯爵 お聞きなさい、素敵なお嬢さん…もし、
偶然、いつの日か、狩の途中で道に迷っ
て、あんたの小屋の脇に出たら…もしも
の話じゃがね…あんたのおうちで腹をす
かせた狩人に何かご馳走してくれるかね。

ブーロット （うやうやしくお辞儀をして）
昼ごはんにかい…何でもお好きなもの
をご馳走しますよ、だんな方！

ポポラーニ わしも会いに行くとしよう…（曲
の反復部）やあ、娘たちだ。あわせて村

じゅうの人も連れだってきたぞ。

（農民男女、上手下手に分かれて入場。
そのなかに書記がいる。紙、羽ペン、イ
ンクを抱えている。ブーロットはサ
フィールの小屋の前の腰掛に座りに行く。
続く合唱の間、オスカル伯爵は娘たち全
員を詳しく見ている。）

第6場 裁判所書記、ポポラーニ、伯爵、ブー ロット、農民男女

合唱 広場に集まれとの、代官様の命令だ

何かおもしろいことを聞かせてくれるよ。

ポポラーニ お集まりの善男善女の皆さん、
ご挨拶を申し、次のことをお伝えします。

輪舞 わたしが持ってきたのは、青ひげ公か
らのお達しであります、

快樂を求めることでは一里四方に高名な
お方です！

かの方はお望みです、いや、こうおっしゃ
いました。「わしの望みは」

バラの王女に冠を授けることです！

その子を見つけること、これぞひと仕事
です…

いることと姿を現すことで、ふた仕事で
あります！

そこで今日は、気まぐれに身をまかすこ
ととしましょう。

くじにバラやその他もろもろを入れます
る。

ですから、わが裁判所書記に、彼が書き
とめられるよう、

あなた方の名前を伝えてください。すぐ
に書き取らせませす。小さな紙のカードに。

これぞ青ひげ公のお達しであります、

快樂を求めることでは一里四方に高名な
お方です！

合唱 これぞ青ひげ公のお達しであります、
など

(この繰り返しの間、テーブルと背もたれのない腰掛けが運ばれ、あずま屋近くに置かれる。裁判所書記が腰掛けに座り、紙を広げて書く準備をする。)

ポポラーニ さあ、お嬢ちゃん、娘さん、書記が書くよ、あんたの名前も苗字も。

女声合唱 (書記を取りまき) ああ！ 名前を書いてよ、苗字もね。素敵な書記さん、親切な書記さん。

羽ペンにインキをつけてよ！

(書記は娘たちの名前を聞き、小さな紙に書きつける。)

ブーロット (立ちあがり、まるで夢みるように舞台中央にやってくる。独り言)
行った方がいいか、行かない方がましか。自分のなかで考えないといけないことだよ。

いいよ！ 危険を冒さねば何も得られないのさ！

(大きな声で、決然と、書記に) よう、名前書きのお方、あたいのも聞いとくれ！

(大きなざわめき)

男声合唱 こりゃ！ ブーロット、勘違いしたか。おこないすぐれた娘の賞だぞ！

全員合唱 こりゃ！ ブーロット、勘違いしたね。おこないすぐれた娘の賞だよ！
(合唱の間、女たちはブーロットを取りかこみ、裁判所書記に近づかせまいとする。ブーロットはいらだってみなを押しつけ逃れる。)

ブーロット 小唄

1、 ともや若気の奇行がはじまった。

よってたかって、あたしが近づくのを邪魔するなんて！

つめを引っ込めな、お姫様たち、あたしを端に押しこめたら、そうともよ、今に見てな！

あんたには権利がある、あたしにもね。あんたたちがそんなにほしがっているその名誉、

どうしてあたしも他の子みたいにほしがっちゃいけないのさ、
とにかく、くじを引かなきゃ決まらないんだからさ。

2、ほんと、丁重に扱われたら、あたしゃ怒りも気取りもしない。

こっちゃん、一かけらも淑女ぶらないよ、どっしりしっかり立派な性分。

わかりきったことさ！

それに、身分だってあんたたちと似たようなもの…

あんたたちがそんなにほしがっているその名誉、

どうしてあたしも他の子みたいにほしがっちゃいけないのさ、
とにかく、くじを引かなきゃ決まらないんだからさ。

(自分の名前を書記に伝え、舞台中央に戻る。)

ポポラーニ (書記に) 名前は全部書いたかね。書記 はい、だんな。

ポポラーニ カゴが必要だが…

農婦 ここにあるわ。(フルーレットの窓のところにあったカゴを取りにいき、花を抜いて、ポポラーニに渡す。)

ポポラーニ 誰が、くじを引くかね。

伯爵 わしじゃ！ よろしければな…

ポポラーニ（伯爵のところにいき、カゴを渡す）閣下がお引きくださいますか…（小聲で伯爵に）さあ、見覚えはありませんかな。

伯爵（小聲で）今の今まではな…じゃが、頭に血が上ってきたぞ…なんだか、体が火照ってくるようじゃ…

ポポラーニ（小聲で）さあ、よろしうございましたな！（伯爵は裁判所書記のすぐそばを通る。彼はカゴのなかに名前を全部入れた。大きな声で）申しておったくじ引きがはじまりますぞ、お嬢様方。最初に出てきた名前がバラを勝ち取るのですじゃ…最初の名前はお聞きなされ！わがあるじの命令によると、くじ引きのあと、時を移さず、バラの王女はその自分の家へ盛大に連れていかれ、豪勢な衣服に改めます。引きつづいて、尊く気高い青ひげ公のまえに出て、そのお手で冠を授かるのです…さあお立会い、お嬢さん方、はじまりますぞ…純潔なる者に与えられる賞を授与するには、純潔なる手が必要でござります。

ブーロット（進みでる）あたしよ！

全員 あたしよ！…あたしよ！…あたしよ！…

ポポラーニ 申しあげたかったのは子どもの手ということですよ…（すぐ右手に一人いるのを見つけて）ちょうど、ここに一人ござったわい。おいで、ちびちゃん…おいで！ こわがainlessで！

子ども おそれおおいの、ほく。

女（子どもを押し）さあ、行きなさい、ちびちゃん。（感情を込めて）そいで、母ちゃんのためにくじをあてておくれ。

ポポラーニ（子どもを伯爵の近くに押しやり）こわがainlessでいいよ、ちっちゃなかわいい子ちゃん…カゴのなかから紙きれ

を1枚取りだしておくれ。（上手を向く）子ども これだよ、おじちゃん、これ！（子ども（男）紙を取り、ポポラーニに渡し、母のすぐ近くに戻る）

ポポラーニ（紙を手に取り叫ぶ）ブーロットだ！

（テーブルと腰掛がどけられる。）

合唱 こん畜生！ ブーロットだった！

なんと！ 何たる驚き！ 運てやつにはびっくらこいた！

幸運が彼女に微笑んだよ、お辞儀の一つもせにゃなるまいて。

（この合唱の間、オスカル伯爵はカゴを調べまわし、手にとる。激情のほとばしりを示す身振り。）

伯爵 おお、奇跡！ おお、驚異！ このカゴには見覚えがある！

誰の、誰のカゴですよ。

合唱 このカゴ！

伯爵 誰の。

合唱 誰の。

伯爵 そうそうそう…そうじゃ！

ブーロット これはフルーレットのカゴさ。

合唱 これはフルーレットのカゴさ。ここに小粋な家があるよ！

伯爵 結構じゃ！ 離れてくれ。人払いじゃ、みんな、そうじゃ、みんな、みんな！

合唱 何だって、みんな、みんな、みんな！

伯爵 そうじゃ、みんな、みんな、みんな！

合唱 言うことを聞こう、離れよう、みんな、みんな、みんな、みんな！

（この曲の最後の部分で、ポポラーニは白バラを摘み、それでブーロットを飾って楽しんでいる。合唱の最後で、ポポラーニはブーロットの手を取り、下手へ退場。農夫たちが後についていく。農夫

たちは上手へ消える。オスカル伯爵は一人が残る。)

第7場 伯爵，続いてフルーレット

伯爵 (一人，ずっとカゴを抱えている) 不思議！ 不思議！…何じゃやら，フルーレットだって…

(カゴを窓のへりに置きにいき，フルーレットの扉を叩く。)

フルーレット (小屋から出て) 何か御用かしら。

伯爵 ちょっとお話が，かわいい方よ！

フルーレット お望みはお花ですか。

伯爵 あなたに支払うつもりできた代金につりあうほどの花は，あなたのお店じゅう探しても見つかりますまい…

フルーレット 名誉にならぬことをおっしゃりたいなら，とっとと行っておしまいになった方がよろしいわよ。

伯爵 わしのことがおわかりにならんようじゃな。

フルーレット じゃあ，説明してくださいな。

伯爵 あなたは娘さんでしたな，あの…

フルーレット リュシスカじいさんのね，いかめしい老人でしたわ…

伯爵 そのいかめしい老人があなたの父ではないという話はお聞きになりませんでしたかな。

フルーレット 聞きましたとも，何度か。

伯爵 何か疑うような気持ちにはなりませんでしたかな。

フルーレット そういうのは悪い冷やかしだとしか思いませんでしたわ。

伯爵 何か他のこともわかったはずです…思いだして…思いだして…

フルーレット 何がおっしゃりたいのかしら…困っちゃうな…

伯爵 考えをあなたの子ども時代の最初の年

までお戻しなさい…宮殿です…広大な宮殿です…よろいに金をつけた衛兵ども，きらめく装身具を見につけたご婦人方…若い貴族方…その真ん中で，頭に冠をのせて，夫が妻と言ひあらそっている…豪勢できらきらした，惨めで見栄っぱりな，宮廷です…宮廷ですよ，まったく！…思いだして…思いだして！

フルーレット (こころを奪われ) 見える，見える，思いだしたわ…

伯爵 その後，ほとんど一挙に，とんでもない冷たさでおののくでしょう…水です，いたるところ水です…ぐるっと川に取りまかれています。右に左に川の岸です。川の流れの上に空があります。空の下，川の上に，カゴです，流れ，流れて，川波に揺られて…そのカゴのなかに子どもがいます…思いだしてください…思いだしてください！…

フルーレット 見える，見える，思いだしたわ…

伯爵 もう言葉を加える必要もござるまい…あなた様はエルミア姫です。わがあるじ，王のお娘ごですじゃ。

フルーレット (びっくりして) 娘ですって…

伯爵 (ひざまずいて) ボベシュ王の，ですわい！

フルーレット ボベシュ王の娘ですって！…(伯爵を引き起こす) でも，政治向きのことにはそんなに詳しくないけれど，ボベシュ王にはご子息がいらっしゃるはず…

伯爵 若き王子は，あなたの弟ですじゃ。

フルーレット あたしより年下の…

伯爵 陛下より年下でござる。

フルーレット ではその陛下が王位を相続するのですか。

伯爵 おおせの通りです。

フルーレット あなたがあたしを連れてって
くれるの…

伯爵 お父上様の宮廷へな。

フルーレット いつ発つのかしら。

伯爵 今すぐでございます。部下のものを呼
びよせるだけですからして…ここから
20歩はなれたところに控えております
…ですが、旅だちに当たって、何かお持
ちになりたいものはござらぬかな。

フルーレット もちろんあるわよ！ 考えさ
せてくれてありがとう、あたし持ってい
きたいものがあるわ、（サフィールの小
屋までいく。）サフィール！ サフィ
ール！…来て、サフィール、こわがらない
で、呼んでいるのはあたしよ…（サフィ
ール入場）

第8場 同、サフィール。

サフィール ぼくはここだよ、かわいいフル
ーレット。

伯爵 （サフィールをじろじろ見て）こりゃ
いったい、何ですかな。

フルーレット 何って…あたしが持っていき
たいって言うのはこの人よ。

伯爵 羊飼いですか。

フルーレット 羊飼いです。

伯爵 考えなおされてはいかがかな、姫君。

サフィール （驚いて）姫君だって！…

フルーレット そう、姫君なの。ちょっと前
まで、羊飼いだっただけ、今はボベシュ
王の娘なのよ。

サフィール ボベシュって！

フルーレット 怖くなったんじゃないかしら
…これでお別れだって思ってるのね…ま
た、あたしたちで取りかわした誓いがど
うなるんだろうとか…心配ないわ、あん
たもあたしと一緒に御殿に連れて行くか

ら！

伯爵 とんでもない！

フルーレット（威厳を持って）この人、連
れていきます…そなたの部下を呼び、出
立です。

伯爵 今一度ご思案を、姫君…

フルーレット 部下を呼びなさい。

伯爵 羊飼いを連れていくなんて！…これが
羊なら、まだよいのだが…バラ色のリボ
ンをつけた子羊が、あっちへとことこ、
こっちへとことこ駆けていく…⁹⁾

フルーレット そなたは言いましたよ、あた
しが王の娘だと…

伯爵 そりゃそうですが。

フルーレット とすれば、あたしが何か言え
ば、そなたはそれに従うしかないでしょ
う。

伯爵（ひざまづいて）姫様！

（伯爵は立ち上がり、下手に合図する。
四人の小姓が入場。続いて四人の男が
〔東洋風の〕輿（こし）を担いでついて
くる。それを舞台中央に置く。）

担ぎ手と小姓の合唱 おこしのうえに乗りな
され、そのうえには天蓋つき。

いたずら好きは振るいつき¹⁰⁾

長い道中ぬくぬくと

フルーレット（サフィールに）おいで、こ
のこしについといで、その上には天蓋つ
き

とろけるいたずらっ子、楽しいいたずらっ

9) ここに以下のような演出上の助言を書きこんで
いた。「フルーレットのことをたとえているのだろ
うが、羊が一匹、羊が二匹、とこれが夢であれば
いいのにと数えるようにセリフを作ってもいいと
思います。」

10) 駄洒落として訳した。原文はbaldaquin, Cré coquin,
Cré coquin. 次の行も韻を踏んでいる。

子、恋の道行きよ！

（フルーレットはこしに乗り、担ぎ手が持ち上げる。その時、武装した男たちを従えて青ひげが山の上にあられる。こしの幕は開いている。青ひげの目はエルミア姫にとまる。青ひげは荒々しい恋情にとられる。）

合唱の繰り返し おこしのうえに乗りなされ、
など。

（担ぎ手は行進を始める。下手奥から退場。オスカル伯爵が先導し、サフィールがついていく。）

第9場 青ひげ、武装兵士たち

（姫君の行列がいなくなると、青ひげが降りてくる。その家来もついてくる。）

青ひげ またいたぞ、兵どもよ、美女の中の美女だ！

なぜ運命は美女どもをわしの通り道においていくのか

その女どもはまるで偶然の出来事のような死でわしの手からもぎ取られるのだ！

小唄

1、わしの最初の妻は死んだ。

そりゃ悪魔に魅入られたのだ、どんな風にかはわからんけどな！

2番目と3番目の妻、また4番目の妻の時、同じように泣いたもんだ。

5番目の妻はわしにやさしかった。しかし、先週、びっくりしたことになる、恐ろしいねえ！ 何の理由もなく、3人の死の女神が

一瞬のうちにその命を摘み取ったぞ…、わしは青ひげ、あらちよいと[あら楽し]¹¹⁾！

こんな陽気なやもめはいない！

兵士たち この人、青ひげ、あらちよいと！
こんな陽気なやもめはいない！

2、青ひげ 人がわしをどう呼び、どう名づけているか言ったからには、
誰もがすぐにわかるだろうが、ただ一つ、
わしが考えてるのは
わしがあれほど愛した女に、あの女が取ってかわること！
わしらのあいだで、もう決まったこと、
6番目の妻の準備完了、
じゃが何が起こるかは了解じゃ…
わかつとる、すでに7番目についてもぼんやりと思案中、これも確かじゃ…
わしは青ひげ、など。

兵士たち この人、青ひげ、など。

（ポポラーニ、下手より入場。武装兵士は奥より退場。）

第10場 同、ポポラーニ。

青ひげ 来たな、ポポラーニ、わしの忠実な錬金術師よ…

ポポラーニ （ひざまづく）わが君…

青ひげ こしに乗って行くのを見たあの娘、
存じておるか…わしの見間違えでなければ、オスカル伯爵がじきじきに付きそっておったが。

ポポラーニ あの娘は、見ためはどうでも、
ポベシュ王の由緒正しいおん娘ご。

青ひげ 何でこんなところに！…わしが新しい連れあいをおひろめするときに、御殿で再会することになろう…

ポポラーニ 殿の新しいお連れあいですとな！

青ひげ おぬし、わしの年になって妻も持たずに暮らしたいと思うか。

11) ô gué!というはやし文句に当てる訳語のゆれ幅を示している。

ポポラーニ 恐怖！ 恐怖！ 地獄の恐怖で
ございます！…

青ひげ 震えておるか！…新たな婚礼のこと
を思うと、わしは笑えてくるが、おぬし
はぶるぶる震えとるな。

ポポラーニ おわかりでしょう、このわたく
しこそがあのことを…

青ひげ みなまで言うな！…わしの愛のため
に、連れあいの女たちがしばらく目を開
けていた後で、おぬしが手配して、あの
者どもに決して覚めぬ健やかな眠りをも
たらせてくれるのだ、おお、恐ろしい鍊
金術師よ！

ポポラーニ 殿は顔も赤らめなさらないので
すか。

青ひげ いいや、赤くなったりなどせん。白
状するが、わしの性格にはいささか詩人
の気があってな！…一人の女は愛さず、
すべての女を愛するのだ…やさしいだろ
う！…一人だけの女にくっついておると、
他の女どもを侮辱しておるように思うの
じゃな…それに加えて、わしには良心の
とがめがあってな、正式な婚礼のほかに
妻をめとってはならんと思えんの
じゃ。わしのすることを見とるおぬしに
は明らかじゃろう。おぬしには何も隠せ
んわい。

ポポラーニ あれまあ！…新たなお連れあい
とはどなたなのかお尋ねしてもよろしい
でしょうか。

青ひげ 誰にわかる…わしにもわからん…わ
しの命令を執行したか。

ポポラーニ はっ、わが君。おんみずから、
バラの王女に冠をお授けになりますよう
に。

青ひげ どんな娘じゃ。

ポポラーニ あの…女ですよ…

青ひげ そりゃ聞いたわい。どんなたちの女

かと聞いておる…

ポポラーニ 美女ってすじですが…

青ひげ その女はこれまでわしが出会った女
どもに似ておるか。

ポポラーニ おお！ この女にかぎって、似
てはおらんですよ…イゾール・ド・ヴァ
ルボン¹²⁾のイゾールと新たに再会なさり
たいと思われるなら…

青ひげ あのかわいいイゾールか…いたく愛
しておったぞ！…すりゃ、バラの王女は
あの者に似とらんか。

ポポラーニ 全然、似とらんですよ。

青ひげ これ、話さんか！…何としても言わ
せるぞ…とどのつまり、どんな風情なの
か、そのバラの王女は！…わしのために
その女の肖像を描いておくれ。

（繰り返しの小器楽部。）

ポポラーニ （下手を見ながら）そりゃ無駄
ですわい、もう来ましたぞ、殿のもとへ
連れられてきました！

（バラの王女がおつきの者とともに、下
手奥より入場。おつきは舞台を一回りす
る。）

第11場 同、（オレンジの花に覆われた白い 着物の）ブーロット、農民男女

（裁判所書記がおつきの先頭、次にベールで覆われたブーロットがやってくる。彼女と同じように白い着物を着た2人の娘に挟まれている。2人の娘の片方はオレンジの花冠〔純潔の象徴〕を捧げ、もう片方はマカロン〔丸い固焼き菓子〕と呼ばれるクッションを持っている。農民男女、小脇に花やりボンを抱えている。舞台中央に着くと、ブーロットはとまる。2人の娘はブーロットの後ろに居る。冠

12) ブルボン王家、またその傍系にはイザベラ、イザベルという名をもつ女性は何人かいる。

を持った娘は下手、もう1人は上手。

フィナーレ

合唱 われらが殿をたたえよ、たたえよ、お
ん手ずからお授けになりたいとのこと
おこない優れた娘に冠を、
純潔はいつも報われるとお示しになる！
われらが殿をたたえよ、たたえよ！

青ひげ わしが思うに。実際のところ。純潔
は報われることになろうぞ！

(2人の娘はブーロットのベールを上げる。
彼女は感動して、青ひげに挨拶する。満
場の沈黙の中、青ひげはブーロットに近
づき、注意ぶかく眺めまわす。彼女を調
べた後で、青ひげは舞台前面に進み出て
熱烈に語る。)

小唄

1, こりゃ、ルーベンスだ！ 人呼んで、あ
ばずれ、野卑な田舎娘、
どこから見てもがちりできてる！
わしは侯爵夫人のおりっ子には飽き飽き
しておる、
この女にはそういうところはかけらもな
い！
こりゃ、ルーベンスだ！

合唱 こりゃ、ルーベンスだ！

2, 青ひげ こりゃ、ルーベンスだ！
たくましく、強い、陽気者
言いよってくる男がうっとうしければ、
でっかい拳固で撃退だ！
野卑で、素朴だ
その優美さはいささか強烈…
こりゃ、ルーベンスだ！

合唱 こりゃ、ルーベンスだ！

(マカロン [クッション] を持つ娘がそ
れをブーロットのまえにおく。)

ポポラーニ (ブーロットに) さあ、おいで
なさい、このマカロンにひざまづくの
じゃ！
(ブーロット、ひざまづく)

合唱 バラの王女に、ああ！ 何たる名誉！
ブーロット万歳、殿様万歳！

ポポラーニ 静粛！ 静粛！ 殿のさわやか
な弁舌をご嘆賞あれ！
(青ひげ、冠を取りあげ、ブーロットの
額に置く。)

小唄

1, 青ひげ お前のすぐれたおこないに与え
ねばならぬ、このしるしを受けて
いつもそうであったように、賢くあり続
けるよう約束しなさい。

ブーロット (立ちあがり) 買いかぶりかね
…そりゃいいねえ。
あたしにゃ、どうでもいいからねえ。
(またひざまづく)

2, 青ひげ 何日かすれば、たぶんもうじき、
お前の夫を連れてこよう。その日には今
のように、その夫にふさわしくしておれ
よ。

ブーロット (立ちあがり) 買いかぶりかね
…そりゃいいねえ。
あたしにゃ、どうでもいいからねえ。

青ひげ 聞くがよい、百姓に家来ども！…

これから途方もないことをしでかすぞよ！
汝らに先駆けて、[万人平等という大革命の] 大原則をやってのける！
新時代を切り開くのじゃ！
高貴で高潔な血筋の気高く大いなる領主たる余、青ひげ公、
いろいろな理由から、御殿とわらぶき小屋の結合を祈願する。
王者たる余は羊飼いをめとる、わが先祖のひげにかけて！

合唱（感じいって）羊飼いととは！

青ひげ（ブーロットを指して）この羊飼いいじゃ！

ポポラーニ（腹の皮をよじらせて、独り言）

ああ！ 何たる羊飼いかね！

ブーロット（感動して）そりゃ、よう、ほんとかい、殿様。

青ひげ（きっぱりと尊大に）名誉にかけての言葉じゃ！

ブーロット（丁寧にお辞儀をして）ああ、わたしには何たる名誉！

ポポラーニ（小声で、ブーロットに）青ひげの妻だぞ！ 怖くないのか。

ブーロット 誰、あたしが、こわがる…

ばかな、百姓でも殿様でもあたしが男を怖がるもんかね。

青ひげ さあ、準備してわしの館へ戻ろう！

この祭りはこれで打ちきりにしたい、今日、この夜から！

この道のり、騎士たる者は、身分にふさわしく馬に乗れ、

徒歩で行く者は慣例に従い、徒歩で行け

合唱 徒歩で行く者は慣例に従い、徒歩で行け

青ひげ さあ、進め、さあ、出発！ 陽気に、陽気に、婚礼だ！

結婚は甘し！

さあ、進め、さあ、出発！ 熱く、熱く、陽気に出発！ 待ちかねたぞ！

合唱 さあ、進め、さあ、出発！ 陽気に、陽気に、婚礼なさい！

結婚は甘し！

さあ、進め、さあ、出発！ 熱く、熱く、陽気に出発！ 待ちかねてるぞ！

ブーロット（青ひげを見ながら独り言）あたしを気に入ったこの男、評判悪いも承知だよ。

でも、ままよ！…何でもやってみな！ リスクを犯さなきゃもらいもないよ！

青ひげと合唱（繰り返えし）さあ、進め、さあ、出発！ など

最初は1歩、小さい1歩、音も静かに、続いて駆け足、小さい駆け足、もっと駆け足、もっと早足！

オップ・ラ！ オップ・ラ！ トララララ。

ポポラーニ さあ、行くぞ、百姓に家来！ さあ、行くぞ、片時も早く！

2人の恋人のおつきになろう！

（合唱の繰り返しの間、おつきの行列ができ、行進が始まる。下手から出発し、前面まで舞台を横切り、山へ進む。武装兵士の半分が行進の先頭に立つ。次に農婦たち、次に青ひげとブーロット、次に残った武装兵士と最後に農夫たち。ポポラーニと裁判所書記がおつきを導く。）

青ひげ、ブーロット、ポポラーニと合唱

さあ、進め、さあ、出発！など

最初は1歩、小さい1歩、など。

青ひげ（ブーロットの手を取り、舞台前面

に到着）わしは青ひげ、あらちよいと！

こんな陽気なやもめはいない！

兵士たち この人、青ひげ、あらちよいと！

こんな陽気なやもめはいない！

（山の中央に着くと、青ひげとブーロットはとまり、農夫たちにあいさつ。農夫たちは下にいて、帽子を振る。絵になる。）

第2幕 第1景 王宮

先祖たちの広間、何枚もの全身を描いた肖像画で飾られている。奥には回廊につながりながら三つの大きな出入り口がある。上手、中景には王の居室への扉。下手正面向きに王妃の居室への扉。舞台の中景両脇には台座に乗った大壺が並んでいる。上手前景に、1本足の小型丸テーブル（guéridon）[ナポレオン時代に流行した家具。すぐ移動させて使えるため1本足になっているが、足自体は十字に木を組み合わせたどっしりした作り。召使二人で運ばせたと思われる] 1つ。その横に王の玉座。下手寄りに似たような椅子がもう1つ。奥、上手と下手に椅子。

第1場

アルヴァレス、家来たち、続いて伯爵、続いて小姓。

（アルヴァレス、家来たちの下手先頭にいる。）

合唱 あるじがおなりだ。お城にはせ参じだよ。

とことん優美に、お高くとまって。これも好きでやってるのさ。

（奥から、オスカル伯爵が入場。夢みるよう。）

伯爵（独り言）わしはリシュリユウ（Richelieu）

になるのか、オリヴァレス（Olivarès）

になるのか。[ともに乱世に困難な政局運営をした宰相]

合唱 宰相閣下だ！ やけに沈んでるぞ！

伯爵（会釈して）おのおの方、ごきげんよう。

合唱（会釈して）われらはあなた様の家来。

伯爵（苦々しげに、独り言）今日の家来も！

明日は敵！

宮仕えなりや、わしが願えば、皆、宮仕えの決まり文句を

この上なく上手に繰り返す心得があろう。

（セリフで、家来たちに）歌おう、おのおの方。

小唄

1、宮仕えっていう仕事は難しいね、

だから、自分では抜け目ないと思っても、気がつけばどつぱにはまるのさ。

宮廷人として出世したけりや、お辞儀、お辞儀、お辞儀しなきゃ、

身をかめすぎて背骨も曲がっちゃう。

（「お辞儀」の歌詞のところで、深く大げさにお辞儀する。）

合唱 出世したけりや、お辞儀、など。

2、伯爵 何でもあるじの言うことにや、まづ気絶して見せねばな。

またそれが馬鹿なことなら、笑うんじゃなくて身をよじるのさ！

よく宮廷人として出世したけりや、お辞儀、お辞儀、お辞儀しなきゃ、

身をかめすぎて背骨も曲がっちゃう。

合唱 出世したけりゃ、お辞儀、など。

伯爵（独り言、身をかかめた家来たちを見て）
わし何か言ったかね。

小姓（上手から入場し告げる）王ですぞ！
（伯爵の回りに輪になっていた家来たちは下手に行く。みな熱心に2列に並ぶ。アルヴァレスはいつも先頭。ボベシュ王は上手から入場。家来たちはオスカル伯爵と同様、腰をかかめて深くお辞儀している。）

伯爵 ボベシュ陛下です

第2場 同、ボベシュ王、もう1人別の小姓がついてくる。

（王は階段を駆けあがる、その姿はいかにも満足そう。2人の小姓は小型丸テーブルの後ろにいる。）

ボベシュ 昨日より5センチは低いな…たいへん結構！（他の人よりアルヴァレスの腰のかかめ方が少ないのを見てとり）
ああ！ とはいうものの…（それがアルヴァレスだと分かって）アルヴァレス！
…他にこんなやつはおらんぞ！…がまん、がまんじゃ！…（高さをそろえるためにアルヴァレスの頭をぼんぼんと叩きながら）他の者と同じにな、そなたも、他の者と同じにな！…（しばらく沈黙があって、手を打つ。）パン！…パン！…（家来たちは身を起こす。）オスカル伯爵、今日の公務を読み上げよ。

伯爵（第2の小姓が彼に渡した紙を取り上げ、読む）「2時にはサフィール王子の拝謁の式。かのかたはエルミア王女を妻にめとりに戻られます。お庭にて家来一同にてお迎えし、カンタータ5番を歌って差しあげたあと…」殿もご存知でございます。（歌う）

「ああ！ 今日日は吉日！ ああ！ 今日日は吉日！…」

アルヴァレス（曲を歌いつぐ）「ああ！ 今日日は吉日！…」

ボベシュ（きびしく）もうよい、たくさんじゃ！…オスカル伯、続けよ。

伯爵（読む）「家来一同でお迎えした後、わたくしが若き王子をお連れして王、王妃、若き姫君の御前に向かいます…水入らずで…ご家族の団らんのひと時でございます。」

ボベシュ（アルヴァレスの方を向いて）おしゃべりするな、アルヴァレス殿！

アルヴァレス 拙者ではござりませぬ、殿。
ボベシュ おぬしがしゃべったと申しておる…

アルヴァレス 紳士の誇りにかけて「ありえぬこと」！

ボベシュ また、そなたか！…わしに話をする者があるときは、沈黙を守らねばならぬとは存じておろう…続けよ、オスカル伯。

伯爵（読む）「3時、青ひげ公とその新たな伴侶とご拝謁。カンタータ9番。」

ボベシュ（歌う）「ほら、この幸せな二人が…小またで（à petits pas）歩いてくるよ…」
続けよ。

伯爵（読む）「祝宴とご婦人の手に接吻する宴。この先祖たちの広間にて。（家来たち全員、先祖の肖像画にお辞儀する。ボベシュは手を2回打ち、立ちあがる。）8時、夕食。深夜0時、王子と王女の婚姻の儀、カンタータ22番。」

ボベシュ（歌う）「婚姻の儀よ！…おお、よき日かな…」

伯爵（読む）「0時半、花火、演奏会および舞踏会。」以上でござります。（紙を小姓に返す。）

ボベシュ (家来たちに) 言うまでもないと思うが、諸卿よ、種々の儀式に備えて、入念な身支度がいり用じゃ…さて、退出されよ、諸卿よ。そなた、アルヴァレスは残るがよい…。
(王は手を2回打って出発の合図をする。)

合唱の繰り返し

合唱 出世したけりゃ、お辞儀、など。

(アルヴァレス以外の家来は奥から退場。
2人の小姓は上手に入る。)

第3場 アルヴァレス、ボベシュ、伯爵

ボベシュ (アルヴァレスに) 今朝は何時に起きたのじゃ。

アルヴァレス 何時でも陛下のお望みのままでございます。

ボベシュ (苦々しく独り言) そして王は真実を知るよう求められておるのだ!…(大きく、アルヴァレスに) では、そちが今朝7時に起きて庭に降りていった時、一人の女に出おうたな。

アルヴァレス おきさき様です…

ボベシュ その女は誰と名指しはしとらんぞよ…名前を言わんほうが都合がいいのじゃ…そなたは結婚しとるか。

アルヴァレス いいえ、陛下。

ボベシュ 子どもくらいはおらんのか。

アルヴァレス いいえ、陛下。

ボベシュ よろしい。そなたの子らと妻はわしを第2の父とするじゃろう…下がるがよい! 他には話はない…

アルヴァレス (両手で頭を抱える。独り言)
おお! 破滅だ!…わしはもう破滅だ!
(奥から退場)

第4場 ボベシュ、伯爵

ボベシュ わしの話がわかったか。

伯爵 ああ、何と! また、血を流されるのですか。

ボベシュ やむをえん!

伯爵 それで、もはや4人になりますぞ、庭で女王に会った者は。そしてその者らは、2時間後には…。

ボベシュ (恐怖を感じて) もはや4人とは!

伯爵 思いとどまるべきです。陛下は命令するお声ですが、それがしは処罰する腕…もう、疲れてきましたわい。それに悔いも残ります…夜ともなると胸にしみるのです…ついおとといも、わしは叫んでしまいました…それで飛びおきましたですじゃ。オスカル伯爵夫人がわしに言いました。「どうしたの、あなた…」それが悔いのせいだなどと、わしには言えませなんだ…何でも妻が思う通りのものと思わせときましたわい。

ボベシュ わかるぞ。

伯爵 思いとどまるべきです。

ボベシュ ばあ、またそれか…後で考えよう…(上手へ歩く。)では、国のことにかかるとしよう。(小型丸テーブルの上の金をちりばめたがらがらを回す。小姓が上手から入場。)わしにこの世界をもつてこい!…(小姓が地球儀をもってきて、テーブルの上に置き、去る。伯爵に) 政治の展望というものに仔細に目をさらしたことがあるか。

伯爵 もちろんですとも、陛下。

ボベシュ (テーブル近くに腰かけ、地球儀を回して手慰みにする。)わしもだ、そこで一つの意見がある。

伯爵 (近より) 何のことかわかりませんが、どこまでもおとしますぞ。

ボベシュ わしの意見とはな、青ひげ公の素行がはっきりせんということじゃ…妻が5人も姿を消しておる…そなたに様子を

探れとは申しつけてなかったか。

伯爵 3人目の妻が消えた後、わしは探りに参りました…会話のきっかけとして、「なくなったイゾール・ド・ヴァルボン立派な方でしたなあ」とわしは申しました。青ひげ答えて言うには、「さよう、立派な女じゃったが、どれも同じようなものですわい」とやら。わしはそのとき、それ以上、踏みこんで尋ねにやらんとは思わなかったのです。

ボベシュ よくやった…しかし、それほどの罪は罰せられもせずにくすむとは思えんが…5人の妻じゃぞ！…

伯爵 さようです、陛下。あの者は5人もの女を消ししまったのです…まるっきりわしのようですよ、あなた様のご命令で、わしは5人やつてのけましたぞ…

ボベシュ よくも1億の民に命令を下す王の行いと、3千人の領民しかおらぬ意地悪な小国の君主の行いを比べたものじゃな…

伯爵 陛下！…

ボベシュ わかっておろう…そんなことは言うまい…押しつぶさねばならん…押しつぶすのじゃ！

伯爵 それは、あの青ひげ公には彼を律する規律があるからです！…それに引きかえ、あなた様にはそれが何もありませぬ！

ボベシュ 何、わしを律する規律がないと…

伯爵 もちろん！ 昨年、あなた様はご自分の騎馬像をほしがったでしょう…そのとき、あなたの規律などまるでなくなってしまったのです。

ボベシュ しかし、わしの像を建てて以来、わしの砲術学校長は、彼にやった金をどうしたんだろう。

伯爵 女に使っちゃったんです。

ボベシュ 少なくとも、わしらを招待してく

れてもよさそうなもんだが！

伯爵 わたしは招待されましたよ。

ボベシュ そなたを招待した…ああ！…（声の調子を変えて）それじゃ、あれを押しつぶすまでもないというのが、そなたの意見じゃな。

伯爵 押しつぶさぬだけでなく、青ひげ公を相応にもてなさねばなりません。そして彼に従うのです、何ごとかを命ずることが、この恐るべき君主の気に入るならね！

ボベシュ よいわ！…あやつに従おう。

伯爵 決まりでござりますか、陛下。

ボベシュ 決まったわ！…（誇りに満ちて上手へ歩く。）人は強いものじゃ、決意を固めたときにはな！¹³⁾

第5場 同、小姓、続いてクレマンティーヌ女王、それにもう1人の小姓がついてくる。

小姓（下手より入場し告げる）女王様です！（クレマンティーヌがあらわれる、第2の小姓がついてくる。）

ボベシュ（クレマンティーヌの入場を見て独り言）イゾール・ド・ヴァルボンに生き写しだな、女王は…とはいえ、微妙に違うけれども…えらく愛想の悪い女じゃ、じゃがそれは誰でも同じじゃ。（伯爵に）さあ、オスカル伯、アルヴァレス殿には二言ほど言うことがあるのを忘れるなよ。

クレマンティーヌ ああ！ アルヴァレスについてでしたら、オスカル伯。

伯爵（快活に近づいて行き）何でしょう、陛下…

クレマンティーヌ あの方に伝えていただき

13) このあたり、オレンジ公フィリップをボベシュ王にたとえ、青ひげをナポレオン3世にたとえるなどの諷刺か。

たいのです。ご所望のものについてよく考えてみたところ、それはかなえられるだろうと思いますとね。

ボベシュ（小声で伯爵に）それでも、大めに見てやれというのだな！

伯爵（小声で）よろしくごさいます。陛下、御意のままに。
（伯爵、奥へ退場。ボベシュは舞台前面まで出てきて下手に去る。小姓たち下手に下がる。）

第6場 ボベシュ、クレマンティーヌ

ボベシュ さあ、何が望みだ、奥や。

クレマンティーヌ 娘とあたくしに本日の行事を正式に知らせてよこしました。

ボベシュ さようか。

クレマンティーヌ 今晚の真夜中に、あたくしの娘がサフィール王子と結婚せねばならぬとあります。

ボベシュ その通りじゃ。

クレマンティーヌ それですよ！ あなた、この結婚はできませんよ。

ボベシュ なぜ。ああ！ なぜか言ってみい。

クレマンティーヌ あたくし、娘の気持ちはよくわかっております…あれには他に好きな者がおります。

ボベシュ（皮肉に）じゃが、一人の人を愛していても別の人と結婚することはできるじゃろう。

クレマンティーヌ（語気を強め）ああ！それはわかってますわ。

ボベシュ 奥よ！

クレマンティーヌ あたくしもあなた様もそのことは存じておりますが、そうした類の結びつきから生じるのは何でございます。

ボベシュ そのことは申したくはない。そなたはわしにいつもその話をするが。そな

たはまちがとる。会話にふさわしい話題ではないわ。

クレマンティーヌ あたくしにはそのことを申しあげる権利があります…あたくしは過ちを犯すところまでいったことがござりませんからね…

ボベシュ そりゃ、わしがそなたを危ない瀬戸際で食いとめておるからじゃ。

クレマンティーヌ 絶対にありませんよ、あなた、でも…似たようなことがあった場合、妻が情状酌量を申し立てられることをお認めなさい。

小唄

- 1、無垢の天使〔王女のこと〕が連れてこられます、あたくしが17の時のように。
ある日、いとも不快な王子の前にその娘は連れていかれたの…
それがはじまり。
娘は泣いて、元気をなくした。でも国家の理性が彼女の言い分を聞こえなくさせた。
要するに、娘はボベシュ王と結婚した！
…
これでおしまい！

- 2、ある晩、いと気高き殿がお城に現れた、彼は無礼にも、女王に愛を語った…
それがはじまり。
怒りで女王は青ざめた。
でもあとで、機嫌がよくなって無礼者に女王は微笑みかけた…
ここからはご存知でしょう、ボベシュ王、終わり方もご存知ね！

ボベシュ そなたは不愉快な情熱でいつも語りつづけるが、そりゃ妻というものが夫に語るのを普通は避けようとする事柄

じゃぞ。

クレマンティーヌ 確かにもし自分の娘の幸福にかかわることでなければ、そのことを申しあげはしますまい。

ボベシュ そなたの娘じゃ！…あれはそなたよりも物わかりがよいはずじゃから、この件も穏やかにすませることじゃろう。

クレマンティーヌ 穏やかにですって…ええ、今夜、サフィール王子と結婚することになるとわかって以来、あの子はどうしているかご存知ですか。

ボベシュ どうしておるのじゃ。

クレマンティーヌ あの子は高価な花瓶をいくつも割りましたよ。

ボベシュ わしの大理石風の焼き物 (biscuits) も割ったか！…何たることじゃ！…
(飛びあがりかけるが、クレマンティーヌがとめる。)

クレマンティーヌ おお！ お静かに。もうすぐ、あの子がやって来ますわ…そこの大つぼをあの子が割る時には、ここのも一緒に割るでしょうよ。

(袖で陶器が割れる音。エルミア王女が息せき切って下手から入場。)

第7場 同、王女。

王女 ああ！ あなた様はあたくしをサフィール王子と結婚させたいのね！（下手で花瓶を割る）それ！

クレマンティーヌ （ボベシュに）ご覧の通りよ！…

ボベシュ （娘をとめようとして）エルミア！
…

王女 ああ！ 今晚、真夜中なんて！…（上手の別の花瓶を割る）それ！

ボベシュ （娘に走り寄る）これこれ！…

王女 今に見てなさい！…（地球儀をつかもうとする）

ボベシュ （娘をとめ）そりゃだめだぞ！…
地球儀はだめだ！…

クレマンティーヌ （ボベシュに）言わんこっちゃない！…

ボベシュ （娘を舞台中央に引っ張ってくる）
ちょっと、お前、待ちなさい、冷静にならないといかんよ。

王女 それこそあたしの方からお願いしたいことよ、もしあたしのしたいことをすべて実現していただけるのならね…あんたのサフィール王子なんかと結婚しないわよ！ あたしは羊飼いが好きなの！…その羊飼いったら、あたしが連れてきたのに、ここまで来る途中で、あたしにこういったわ。「君が羊飼いだったときにはぼくらの結婚を家族に話すわけにはいかなかったけど、今じゃ、君が王女なんだから事情は変わった。家族に話してくるよ…」彼、その場であたしと別れたの…待たなきゃいけないわ。

ボベシュ もう手遅れだな、娘や。

クレマンティーヌ 不幸を食いとめるのに遅すぎることなんてないわよ。

ボベシュ 奥や！…

クレマンティーヌ （意味ありげに）新たな不幸をね。

ボベシュ また蒸しかえすのかい…

王女 がんばって、かあさま！（ボベシュに）
かあさまはあたしの味方よ！…（母親に）
がんばって、かあさま！

ボベシュ クレマンティーヌはわしの言うことを聞くよ！…わしの妻じゃからな、クレマンティーヌ！

クレマンティーヌ そうね、でもあなたの妻となる以前に、この子の母だったのよ…

ボベシュ なんと。

クレマンティーヌ あたくしが言いたいことは、あなたの妻である以前に、この子の

母なんですよってこと¹⁴⁾…
 ボベシュ そっちの方がましだな。
 クレマンティーヌ それに…
 ボベシュ それに…だと、もういいわい！…
 (袖で音楽) カンタータが聞こえるぞ…
 若き王子のご入来(じゅらい)だ！(王は立ちあがる。クレマンティーヌと王女は上手に行く。)
 王女 (叫ぶ) おお！ かあさま！ かあさま！…(母の腕に身を投げかける。)
 クレマンティーヌ (娘を支え) おお！ 娘よ！ 娘よ！…
 ボベシュ (下手に寄っていく) 耳を澄ませ、娘よ！
 王女 (姿勢を正し) 怖がらないで、どんな風に王子を出迎えるかごらんになるといいわ！
 (2人の小姓が奥から入場。サフィール王子を先導してくる。王子の入場後、小姓たちは奥にとどまる。)

第8場 同、サフィール王子

小姓 (奥で告げる) サフィール王子のおなり！
 サフィール (奥から入場し、ボベシュとクレマンティーヌに挨拶) 陛下！…奥方様！…(王女に挨拶。) 姫よ！…
 (姫は背を向ける。)
 クレマンティーヌ (小声で、娘に) なかなかいい男よ。
 サフィール いとしい、姫君…(姫はあい変わらず王子に背を向けている。)
 ボベシュ (気分を悪くして) 姫！…これ、姫！…

王女 (サフィールの方に向かう) いやよ！…本人にはっきり言ってやるわ…(目を上げ、サフィールに気づき、彼の腕に飛びこみ喜びの叫びを上げる。) ああ！…

4重唱曲

王女 この人はあたしの羊飼いです！
 みな (驚き) これがその羊飼いととは！
 王女 どうしてあたしを怒らせるの。この人はあたしの羊飼いです！
 みな これがその羊飼いととは！
 王女ほんとにあの人ね！ あたしの羊飼いです！
 衣装を着替えても、心は同じ、羽飾りのついたふちなし帽(toque à plume)の下には
 あたしの羊飼いがいると気づいたわ！
 みな これがその羊飼いととは！
 王女 この人はあたしの羊飼いです！ この美しい額に気づくのは何というよろこび！
 この人はあたしの領主、あたしのあるじ、そしてあたしの恋人！ すぐ結婚させて！
 あたしのそばにすぐ持ってきて、オレンジの花束を、
 あたしの羊飼いと結婚できるなんて！
 この人はあたしの羊飼いです！
 みな これがその羊飼いととは！
 ボベシュ(面喰らって) この人はあたしの羊飼いです！…これがその羊飼いだと！…それじゃ、王子じゃないのか。
 サフィール もちろん王子です！ 王子と羊飼いは一体のものでしかないのです…
 ボベシュ 何のことじゃ。
 サフィール ご説明しましょう。つまり、むかし、狼をしていて、道に迷い…見初めたのです…

14) 1つまえのクレマンティーヌの「母だった」というセリフは、過去の不貞をほのめかす半過去(j'étais)。この行は単純に王女の母だと主張する現在形(je suis)。

ボベシュ ああ！何やら話があるということ
じゃな…（伸びあがり、合図をする。2
人の小姓が上手にひとつ、下手にひとつ
の肘掛け椅子、中央に2つのストゥール
を持ってくる。）ちょうどよかった。式
次第にも家族団らんの時間が設けてある
し、それをどうやって埋めるかは何とも
わからんのだしのう。腰かけよう。（4
人みなで座る。小姓は下がる。サフィー
ールに）さて、これでよしと…

サフィール 昔、狼をしていて、道に迷った
のです。ぼくはそこで、輝くばかりに美
しい羊飼いの娘を見そめたのです。

王女（無邪気に）それあたしよ、かあさま！
クレマンティーヌ そうだったのかい、お前！

サフィール（続ける）ぼくは彼女と同じ村の、
彼女の近くに住むことにしました。羊飼
いに身をやつしてね…恋をするには田舎
に限りますよ！ 町では、心臓がどきど
きすることもないですが、田舎では、こ
ころが野原を駆けまわるんです。

ボベシュ こころが野原を！…野原を駆けま
わるんじゃ！

（王は立ちあがり、4重唱曲を歌いはじめ、
野原で打つ太鼓のふりをする。サフィー
ールはあ然としている。）

4重唱曲

ボベシュ ラン、プラン、プラン、プラン、
プラン！

クレマンティーヌ（同じふりで）ラン、プ
ラン、プラン、プラン、プラン！

王女（同じふりで）ラン、プラン、プラン、
プラン、プラン！

サフィール（面食らっているが、役どころを
わきまえて他の人のようにする）ラン、
プラン、プラン、プラン、プラン！

（王、女王、王女は、最後の音に合わせ

て機械のように、同時に座りなおす…サ
フィールはそれを見てびっくりしながら
も、ほんの少し遅れて座りなおす。）

ボベシュ（サフィールに、セリフとしてご
く自然に）さて、話を続けなさい…

サフィール（セリフ）町では、心臓がどきど
きすることもないですが、田舎では、こ
ころが野原を駆け回ると申しあげたんで
す…

ボベシュ（セリフ）では、もう一度。

（ここでこの場での同じふりで、四重唱
曲繰り返す。）

ボベシュ（立つ）ラン、プラン、プラン、プ
ラン、プラン！

クレマンティーヌ（立つ）ラン、プラン、プ
ラン、プラン、プラン！

王女（同じ）ラン、プラン、プラン、プラン、
プラン！

サフィール（同じ）ラン、プラン、プラン、
プラン、プラン！

（今度はみな一緒に座りなおす）

サフィール（驚き）何のことやら…

ボベシュ なんでもないことじゃ…そなたに
はしゃれっ気があるが、わしらもな…しゃ
れっ気のために熱意がなくなるというわ
けではないんじゃ…だから、わしはお前
を息子と呼ぶことができるようになり、
そなたは妻をめとるとのことじゃ。そ
なたについて望むことがあるとすれば、
わしの家と比べられるような家庭を持つ
ことじゃ。楽園じゃ、まさに地上の楽園
じゃぞ！…やさしく従順な娘…愛情豊か
で献身的な妻…わしがクレマンティーヌ
と結婚してもう20年も経つわい、わし
らは最初の日と同じように愛しあつとる

…本当ではないかな、わしの天使ちゃん。
クレマンティーヌ（苦々しげに）そうね、最初の日のように。

ボベシュ（立ちあがる）ティティーヌ〔クレマンティーヌの愛称〕…

クレマンティーヌ（立ちあがる）ボベシュ！
…

ボベシュ おいで、この子に、わしらが、いかに愛しあっとるか見せてやろう…おいで、ティティーヌ、わしにキスしておくれ！

クレマンティーヌ（熱をこめて）死んでもいや！

（王女は心配して立ちあがる。）

ボベシュ 奥や！…

クレマンティーヌ してあげたいのは、やまやまですのに！…

ボベシュ ええっと、わしはな！…みな目のがあるからこそ、言ってみたのじゃ。

クレマンティーヌ 娘や！娘や！ 母さんは馬鹿にされたよ！…

王女 かあさま！…かあさま！…

クレマンティーヌ わらわを守っておくれ…

ボベシュ（2人の女たちのところへいく。クレマンティーヌに）思いちがいだよ、奥や…

王女（王を止めようとして）かあさまを触らないで、ムッシュウ！…（父を押しとどめようとする）

ボベシュ（我慢できず）これ！離せというに！…

（王は娘をやや手荒に押しのけ、下手に行かせる。）

王女（火のついたように）父さんがぶった！
…父さんがぶった！…ああ！…

クレマンティーヌ（激怒して）この人、娘をぶったわ！…ああ！…
（2人とも金切り声を上げる。）

ボベシュ（サフィールに。彼は椅子に釘づけになり、ぽかんとしてこの一部始終を聞いている。）ほれ、これがわが家庭じゃよ…地獄じゃ！ まさにこの世の地獄じゃ！…娘は高価な花瓶を割り、妻は…サフィール 妻は…

（オスカル伯入場、奥に控える2人の小姓に支えられている。）

第9場 同、伯爵。

（オスカル伯は取りみだし青ざめている。一言もいわずに舞台中央まで来る。）

ボベシュ おや、オスカル伯爵じゃないか…（オスカル伯はしゃべろうとするが、椅子の上にくず折れるように座り、言葉を捜せないでいる。）どうかしたのか。

伯爵 お申しつけのことをやってのけましたわい！…

ボベシュ（満足げに）ああ！…すんだのか。

伯爵（震える声で）はい（起きて、立ちあがる）。

ボベシュ（ぱっと顔を輝かせてサフィールに。彼はぽかんとして聞きつづけており、ずっと座っている）妻は…そのおかげでわしは男1人をあやめさせねばならなかった。15分とたたぬ前にな！

クレマンティーヌ（不安げに）男1人がわらわのために殺されたと！…そりゃ誰じゃ。

ボベシュ（恐ろしい声で）アルヴァレスじゃよ、奥や！

クレマンティーヌ（大きな安堵のため息をついて）アルヴァレスですって！ ああ！あなたはわたしを怖い目に合わせたわ…

ボベシュ（独り言）ほほう、結構！…あの者ではなかったようじゃな！…また一からやり直しじゃ！（オーケストラの音楽。大きく）誰じゃ！

伯爵 （また前に出て）青ひげ公と新しい奥様でございます！

ボベシュ よし、家族団らんはこれまで…（小姓たちは椅子を据えなおし、上手から去り、1本足の小型机を持ってくる。オスカル伯に）そなたの勤めぶりには満足しておるぞ…そなたをわが領国の南の土地の代官と定めよう…連中は、今の今まで、わしらの権威を認めようとせんじゃ。

伯爵 ああ！感謝いたします…（立ちあがる）

サフィール （王女に、小声で）家族団らんの間にとっくりと考えてみたよ…結婚してしまったら、ぼくら君の両親にはめったに会わないことにしよう…月に一度は夕食にご招待しよう…それ以上はやめておこう。

クレマンティーヌ （上の空で独り言）アルヴァレスを殺したと…なぜじゃ。何たる人違いか！…

（サフィールと王女は、ボベシュとクレマンティーヌに近い、上手に行く。城の家来と女官どもは奥から入場。）

第10場 同、城の家来、女官、続いて青ひげとブーロット。衛兵たちは奥の回廊にいる。）

フィナーレ

合唱 これぞ幸せな2人！ 小またでやってくるよ。

新郎は、ほっそりしなやか、新婦はあでやか。

伯爵 （ボベシュに）青ひげ公は陛下に新婦をご紹介に上がりました。お祝辞を賜りたいとのことです。

ボベシュ これで6度目じゃ…何を言うかもわかるとる、いつも同じ口上だ！

合唱 いつも同じ口上だ！

ボベシュ とりあえず、聞こう。

伯爵 聞こう…

ボベシュ とりあえず。

（青ひげ、奥よりブーロットと入場。彼女はみごとに着かざっている。）

青ひげ （ボベシュに）

小唄

1、わたくしこと、先週、婚姻の絆をむすびました。

合唱 そりゃ、前も言った！

青ひげ それゆえ、古式に従い、王様に敬意を表すべく参りました…

合唱 そりゃ、前も言った！

青ひげ そして、これなるご夫人を紹介いたします。この者は今やわが妻でございます。

合唱 やめときな！ そりゃ、前も言ったから！

青ひげ というわけで、すべてを申しあげてはいても、もう一度申します…どうぞ、この者です！（ブーロットをボベシュの近くに押しだす。）

2、ブーロット （ボベシュに）ボベシュ王様って、あんただねえ…

何かあたいにしようたって…しゃべらせねえよ。

合唱 （驚いて）こんなこと言う人はいない！

ブーロット （クレマンティーヌを指し）このどっしりしたおっかさまあ、顔色もいいが、

20スーかけてもいいけど、クレマンティーヌさんだね。

合唱 こんなこと言う人はいない！

ブーロット 馬子にも衣装たあ、よく言ったもんだ…服屋のみんなによろしく！

(ひざをおってうやうやしくお辞儀をする)
合唱 やめて！ やめて！ こんなこと言う
人はいない！

青ひげ (小声で、ブーロットに) お前、そ
んなことは言わないものだよ。

ブーロット あたしは言うんだよ…今度はね、
ほら！

(青ひげは急いでブーロットを上手へ押
しかえす。)

ボベシュ (青ひげに、ブーロットの態度を
ひそかに笑いながら) おめでとう、そな
たの奥方は優しいのう。

青ひげ そんなことはおっしゃらないで…お
娘ごの話をいたしましょう。結婚はいつ
ですか。

ボベシュ 今夜、真夜中じゃ！

青ひげ 真夜中ですか。

クレマンティーヌ 婚礼の契約、チャペル…
その他いろいろ！

青ひげ 真夜中ですか。

ボベシュとクレマンティーヌ 真夜中じゃ！

青ひげ (独り言) それだけ時間があれば十
分だ。

ボベシュ 手に接吻する時間といたそう！

伯爵 (家来たちに) おのおの方、接吻なさ
れ！

(伯爵はボベシュの上手に進み、場所を
とる——青ひげとブーロットはその下手
の位置をとる。クレマンティーヌは上手
の椅子に腰掛ける。王女とサフィールは
女王のそばに立って控えている。)

合唱 われらがいかめしい主君の手に接吻を。

伯爵 (第1に進んできたカップルの名を告
げる。セリフで) シュヴァリエ [ナイト
に相当する。男爵のしたの位]・トゥー
ルーキー・クラック [崩れる塔] 夫妻！

ボベシュ (セリフで) 南部のよき貴族の面々
よ！

(諸卿とその妻がやってきては、順にボ
ベシュの手に接吻する。)

合唱 主君の手に接吻を。

青ひげ (姫を見て独り言) ああ！ 何たる
美人、こころにかけて、わが7番目の妻
とならん！

伯爵 (諸卿とその妻の行進が終わると、同
じように告げる、セリフで) 青ひげ公と
その6番目の妻！

(青ひげはブーロットとともに前に出て
くる。)

ブーロット (独り言、サフィールを見、し
ばらくボベシュの手に接吻するのをやめ
る)

ああ、この若造、サテンの服を着て (*Vêtement de satin*) …

でもりんごの名にかけて (*mais, nom d'une pomme*¹⁵⁾)！

あたしのパシリ小僧！ (サフィール向け
て、飛びだしていこうとするが、青ひげ
がとめる)

ボベシュ (手を差しのべ) この王者の手を
差しのべるのは光栄じゃ…

明日まで待ちはず！

(クレマンティーヌは立ちあがる。)

サフィールと王女 (ブーロットに気づき、
独り言) ブーロットだ！…

ブーロット (王女を見て) フルーレットだ！

サフィール (独り言) いやはや、何と！

王女 (小声で、クレマンティーヌへ) ああ！
かあさま！…

15) オッフェンバックの有名作 *La belle Hélène* 『美し
きエレーヌ』[1864]では、トロヤ戦争の故事に言
及し、その世界で「りんご」といえば、美の判定
者としてのパリスが美神ヴェヌスに与え、世界一
の美女エレーヌを約束されたもので、美の判定行
為を連想させる。歌詞として韻を踏むついでに過
去のヒット作の作品世界に言及するくすぐりと推
定する。

クレマンティーヌ 何だえ。

王女（小声で）あの女を見て！

ブーロット（サフィールを見て、独り言）

ああ！ あのこじき野郎！

青ひげ（小声で、ブーロットに）奥や！…

奥や！…

ボベシュ（ずっと手を差しのべたまま、セ

リフ）何事じゃ…

サフィール（不安げに独り言、セリフで）

彼女だ！

ボベシュ（セリフ）何事じゃ…

ブーロット（セリフ）あの人よ！

（上記はすべてこの幕の音楽に乗せて語られる、フィナーレは中断されない。ここでもう一度、歌いはじめる。）

青ひげ（小声で、ブーロットに、ボベシュ

王を指しながら）王は手を差し伸べておいでじゃ…さあ、行け奥よ！

ブーロット それで！ 何なのよ…あたしがしないといけないのは何。

伯爵と合唱 接吻を！

ブーロット それほど接吻が大事なら、あたし接吻する。ここらからの接吻を！

（ボベシュの手に接吻する代わりに、ブーロットはサフィールの方に急いでいき、両頬に接吻する——一同の驚き——クレマンティーヌと王女はブーロットの動きにおびえ、下手へ歩みよる。サフィールはブーロットの手を振りほどくと彼女たちを追って、中央にまたやってくる。）

合唱 何たる恐怖！ オーラ！オーラ！

どこでそんな態度を身につけた。大祝祭での手への接吻もこんな風じゃない！

ブーロット（驚き）どうしてそんなにあたしを怖い目でにらむの。

この叫び、この怒りに満ちた気配は何。

あたし、何、そんなスキャンダルになるようなことしたかしら。

あたしが接吻したときの、あのしかめ面は何。

みんなじたばたしてるのは、あたしをいらだたせるためなの、心配させるためなの。

（オスカル伯爵を指し）接吻しなって言ったのはあのおじさんだよ、

合唱 何たる恐怖！ オーラ！オーラ！

どこでそんな態度を身につけた。

青ひげ（ブーロットに）静かにせよ、さもないと、今度はわしが相手になってやるぞ！

合唱 大祝祭での手への接吻もこんな風じゃない！

ブーロット（サフィールを見ながら）なんて素敵なの、きざな野郎だね！

なんていたずらな目つき！ いけてる感じ！

なんて素敵なの、きざな野郎だね！

それになんていい姿！ 男の色気！ やさしいのね！ かわいいわ！

ああ、きれいなかわい子ちゃん！

ボベシュ（ブーロットに）あの者にではなく… わしにするのだ！

王はわしだぞ！

合唱 こちらが王だ！

ブーロット（ボベシュに）あなたにも…願ってもないことさね！（ボベシュの両頬に接吻）

合唱 ああ！ 大胆すぎる！

ブーロット ここにいる間に、殿方全部に接吻しなきゃいかんかね。（オスカル伯爵に接吻しに行き、つづいて諸卿の方に飛び出しかける）

青ひげ（彼女を止め、舞台中央に連れてくる）やめい、もうよい…出よう、出よう！

ブーロット 何で出るのよ！…いましよう、いましようよ！

全員の合唱

ボベシュ、クレマンティーヌ、王女、サフィー
ル、伯爵、合唱
出ろよ、出ろよ！ 女を連れ出せ！ そ
のやり方は好みじゃない！
大祝祭での手への接吻もこんな風じゃな
い！
このお城の屋根の下で、こんなことはな
かった！

青ひげ（ブーロットに）おいで、おいで！
うちに帰ろう！
あとでこのことはとっくり話し合おう！
こんなおしゃべりはやめよう！
あとで決着をつけよう！
去ろう、去ろう、このお城から、ここか
ら離れるのだ、永久に！

ブーロット どうしたこったね…何で出るの。
だんだん楽しくなってきたのに。
でもいつもこんなもんだね…ここにいた
いの…出てくのさ！
何で出るの。だんだんこの城のなかがお

もしろくなってきたのに。

（この重唱の間に、クレマンティーヌ女
王は半ば気を失っていすに倒れこむ。ボ
ベシュは怒りくるい、青ひげとブーロッ
トに去れと合図をする。青ひげはブー
ロットを何とか連れだそうとする。彼女は、抵抗し、暴れ、全員に投げキスをす
る。とても活気のある情景となり幕が下
りる。）

（第2幕1景終了。同2景、3幕は次号に掲載
予定）

参考文献

1. 黒グライ兒, 2010, 『肉体のアナーキズム——
1960年代・日本美術におけるパフォーマンスの
地下水脈』グラムブックス.
2. Meilhac, Henri et Ludovic Halévy, n.d. [1900-
1902], *Théâtre de Meilhac et Halévy de L'académie
Française*, III, Paris: Carmann Lévy.
3. Tryon, Geo. W., Jr. (ed.), n.d. *Barbe-Bleue
(Bluebeard), Opera Bouffe in Four Acts: Libretto.
Containing Correct English Words*. Philadelpida:
American Opera Publishing Company.